

酪農記念館

一首振る三人と赤ベコー

亀谷 隆



「鋤と鍬」
鋤は踏み込んで土を掘り上げ、鍬は手を振って土を掘り起こす。土地を耕すには欠かせない出来なかった農具。
版画・谷口二郎（札幌）

★長丁場を予測して

昭和47年（1972）10月、十勝支庁管内の清水町に酪農記念館が開館した。

この記念館は、すでに公民館に併設していた郷土資料室の資料を整備して、独立した建物での郷土館にすべく昭和45年（1970）に構想された。

建設にあたっては、町の開基70周年記念事業として教育委員会が窓口となり、社会教育課と建設課が共同して実施したいとのことで、建設に関わる相談が筆者に持ち込まれた。

町の担当課長と係長に「これまで一般的に行われてきた行政主導のやり方ではなく、時間がかかるが、町民の意見を十分に聞き入れるやり方で進めてはどうか？そうすることによって郷土館への愛着が芽生え、運営などにも協力してくれるようになると思います」と進言した。

その進言に対し、課長と係長は「開館まで指導を願えば、私たちも心強く進められます」との

返事であったことから、内心「長丁場になるな」と覚悟を決め、同僚の学芸員2名を加え、3名で指導にあたることにした。

その後、婦人や青年団体、小中学校教諭、町議会議員の代表による委員会が組織され、町にふさわしい郷土館について話し合いが定期的開催された。

その結果、清水町の特徴である酪農を中心とした内容とし、名称も清水町酪農記念館とすることにした。

建物は公民館に隣接した平屋とし、公民館とは渡り廊下でつないで、利用と管理の利便を計ることにし、建築の設計は役場の建設課で行うことにした。

★車輪の大きさを決める

現在、清水町への鉄道は、千歳線を経由し石勝線で新狩勝トンネルを通過して往来することができるが、当時は富良野を経由し、蛇行を繰り返す狩勝峠を越えての経路で、トンネルを抜けての景観は素晴らしく、十勝の雄大さに感動した。

何度か打ち合わせがあって出向いたときのことである。郷土の産業の一つとして、ビートから砂糖を生産していた日本甜菜工場（てんさい）で使われていたトロッコを復元することになり、トロッコの製作図を探し求めたが、残存していないことが判明した。そこで、当時トロッコをけん引していた機関車の運転手と、トロッコの線路を保守していた職員、そしてトロッコの運行を指示していた職員の3人に集ってもらい、トロッコの形など、詳細について聞き取りをすることにした。

「車輪の大きさはどのくらいでした？」との問いに、運転手は両手の親指と中指を広げ、おおよそその円形が予想できるように「50センチくらいかな？」と首を振りながら答えると、保線職員は「いや、いや、もう少し大きかったな」と、これまた首を振って訂正し、さらに運行指示の職員は「いや、もう少し小さかったと記憶している」と首を振っての答えである。

聞いている方は内心「まちまちの大きさで、どれが正確なのか」と首をひねりたい気持ちであるが、そこは我慢をして「なるほど、おおよその大きさが分かりましたので、いま、紙にコンパスで3人の平均した車輪の円を描きますから、もう一

度大きさを思い出して下さい」と描いた円を示した。

車輪の大きさを具体的な図として示すと、また、また、大きい、小さいの話し合いが続き、ついには3人が「これくらいだったな」と鉛筆で円の外周点を印し、ほぼ正確な大きさを決めることができた。

★記憶の不思議

このような現象は、手で示していた記憶の大きさを、具体的な図として示したことにより、それまで頭の中での覚えと、目から頭への覚えとの比較が、脳内で繰り返していたことによって生じたと思われる。

ちょうど、事件で刑事が犯人の人相について、目撃者から聞き取りながら“似顔絵”を描くのと似ており、人の記憶の正確さを求める初歩的な手段である。

日本人の脳の重さは、男子で1,350～1,400g、女子で1,200～1,250gで、脳解剖学者の計算によれば、脳細胞の数は100～150億くらいであるという。

この細胞数は、生まれたての赤ちゃんと、しっかり勉強した20歳の成人とは同じ数で、20歳を過ぎ80歳になるまでの間に数は30%、表面積は10%減少し、数と面積では40%が減少するとされ、細胞数も60億前後になるらしい。

また、人の脳は“忘れる”という働きをするらしく、資料によれば脳の忘却率は、20分後で42%、1時間後で56%、1日後で66%、1カ月後では79%である。

聞き取りをしていた3人の職員がトロッコを見ていたときから10年以上もの時間を経過していたわけだから、すぐに正確な大きさを思い出せなかったのは当然である。

★牛に感謝し、牛乳を生産する

十勝では、畑作として甜菜、豆、^{ばれいしょ}馬鈴薯などの栽培、酪農として乳牛の飼育が明治半ばころから行われ、かつて農作業に使われていた外国産の機具が残されていた。

北海道での酪農を推奨したのは、明治6年(1873)に開拓使顧問のケプロンの下で農業や畜産を教えていた、アメリカ人のエドウィン・ダン(1848-1931)で、ダンが一時帰国し、駐日米国公使館二等書記官として来日した明治17年(1884)に

は、すでに北海道でバターや練乳が製造されていた。

バター製造は、雨竜の町村牧場、札幌の宇部宮牧場で、練乳は明治15年(1882)ころ、今の札幌市大通20丁目あたりで『熊印ミルク』という商品名で製造されていたという。

それにしても、牛乳から製造された練乳の商品名が「熊印」とは、北海道らしいといえれば北海道らしいが、練乳をよく知らない人は、「熊の乳から作ったのでは?」と思ったかも知れない。

北海道で牛乳が生産されていることは、当時の樺太(今のサハリン州)まで知れ渡り、明治44年(1911)に樺太で蟹の缶詰工場を^{かに}経営していた青年が「蟹缶詰は漁のある時期しか操業できないので、その技術と機械で練乳生産する」と『札幌練乳所』を設立したという。

道産子は牛や馬と親しく時を過ごしてきた。筆者が子供のころ、牛は“ベコ”と呼ばれ、清水町での資料調査でも、町の人びとは“ベコ”と呼んでいた。

記念館の展示内容を検討していた一人が「牛に関わる玩具のコレクションを見せたい」との意見から、町は全国の市町村に牛玩具の収集協力をお願いした。

後日、そのコレクションを見ていた老人が「わしらの町も、牛のおもちゃを作ればいいのに」と話し、すぐに「どの牛が気に入りました」と聞くと「あの、福島県の“赤ベコ”だ!」と指さしたとたん、トロッコ車輪の聞き取りでの3人が首を振っていた光景が思い出された。



profile

亀谷 隆

かめや たかし

1943年函館市に生まれる。武蔵野美術大学卒業。公立中学校教諭、市立函館博物館、北海道開拓記念館に勤務し2006年退職。北海道大学、北海道東海大学講師を歴任。現在、北海学園大学講師(博物館学)、特定非営利活動法人公共環境研究機構理事長、北海道博物館協会会員、北海道北方博物館交流協会評議員、地域文化開発研究会主宰など。

谷口 二郎

たにぐち じろう

1932年富良野市に生まれる。北海道大学文学部卒業。北海道庁に勤務し1990年退職。約30年にわたり北海道の自然や生活道具などをモチーフとした版画制作の活動を続けている。